

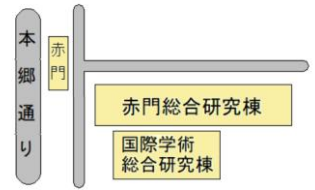
シンポジウム「東洋学・アジア研究の最前線—AI の活用と課題—」

日時：2023 年 12 月 2 日（土）13 時 30 分～17 時 30 分

会場：東京大学本郷キャンパス国際学術総合研究棟 1 階文学部 3 番教室

開会挨拶：斎藤 明（国際仏教学大学院大学特任教授、東洋学・アジア研究連絡協議会会長）

総合司会：島田竜登（東京大学准教授）



報告：大向一輝（東京大学准教授）：人工知能技術の内実と可能性

カラースワット・タリン（Google DeepMind Senior Research Scientist）：AI くずし字認識と大規模言語モデル—日本古典籍から情報を取り出す新しい方法—

上原かおり（フェリス学院大学准教授）：同時代の中国文学に見る AI

宮川 創（国立国語研究所助教）：歴史言語学におけるコーパスデータの整備・分析に AI を活用する—エジプト語史の視点から—

下田正弘（武蔵野大学教授）：アジアからの発信—学術会議分科会活動報告とその一事例—

閉会挨拶：岸本美緒（お茶の水女子大学名誉教授）

聴講無料 参加をご希望の方は、右の QR コードから参加申請フォームにアクセス、
またはお名前・所属・メールアドレスを添えて iec@tohogakkai.com まで。



〔報告要旨集〕

大向一輝：人工知能技術の内実と可能性

生成 AI はその言語処理能力によって近年広く注目を集めているが、人工知能研究には 70 年近い歴史があり、多様なアプローチが存在するため、評価に際しては相対化する必要がある。そこで、本報告では人工知能技術の全体像と歴史的背景を概説するとともに、デジタル人文学の観点から当該技術が人文学研究、とくに東洋学やアジア研究にどのように活用可能であるかについて議論する。

カラースワット・タリン：AI くずし字認識と大規模言語モデル—日本古典籍から情報を取り出す新しい方法—

日本に残された数億点に及ぶ古文書や古典籍のデジタル化と公開が進みつつあるが、大量のデータから情報を取り出し活用するには人工知能（AI）の活用が不可欠である。そこで本発表では、2 種類の AI を組み合わせて大規模に情報を取り出す方法を紹介する。まず画像データからテキストデータを抽出する AI くずし字認識、次にテキストデータから様々な情報を抽出する大規模言語モデル（LLM）を紹介し、この 2 つの技術を組み合わせることで、古典籍から多くの情報が自動的に取り出せることを示す。

上原かおり：同時代の中国文学に見る AI

AI との協働、共生が進む中、AI 活用への期待と不安の声も高まっている。AI の進展は、人間の脳研究とも連動しており、私たちが人間性を問い直す機会も増えている。本発表では、科学技術と人類との関わりを描いてきた SF 文学、特に同時代の中国の SF 作家たちの視点に焦点を当てる。彼らはどのように AI を捉え、どのような未来を想像しているのか。その問題意識、洞察、議論を通じて、AI を活用する際の課題や展望についての手がかりを提供したい。

宮川 創：歴史言語学におけるコーパスデータの整備・分析に AI を活用する—エジプト語史の視点から—

エジプト語は、その最終段階のコプト語を含めると、書記記録が四千年以上の長きに亘るため、通時的言語変化の類稀なデータを提供する言語である。本発表では、OCR や NLP など様々な AI 技術を活用し、テキストデータの構築と高度な分析を行い、新たな言語史研究の枠組みを提示する。この研究手法は、ひいては、他のアジア・アフリカの文献言語にも適用可能であり、多角的な言語学的分析に貢献すると考えられる。

下田正弘：アジアからの発信—学術会議分科会活動報告とその一事例—

コロナ禍とロシア・ウクライナ戦争の勃発を顕在的な契機とし、世界の分断と軍事化が急速に進行する中において、新たなオリエンタリズムが勃興したかの如き昨今、アジア研究の意義を革めて問い、積極的に発信するべき時を迎えている。本発表では、そうした状況を踏まえてなされた第 25 期学術会議「アジア研究・対アジア関係に関する分科会」の活動を報告するとともに、アジア研究が AI 時代に積極的な意義を果たしうる可能性と、その実現に向けた要件を、仏教研究分野の事例をもって提示したい。